

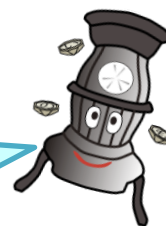
第弐話 だいにわ しょうぶ ま 頭あたまに、巻まいて

- 1200年以上前から、端午の節供が行われていた。
- 聖武天皇も清少納言も、みんな端午節会では、菖蒲を大切にしていた。
- 菖蒲は、悪い気を払う力があると信じられていた。
- 「菖蒲＝尚武」
- 江戸時代になって、庶民に広まった。

「端午の節供」は、「端午節会(たんごのせちえ)」と呼ばれていました。

今から1200年以上前の天平19年(747)5月5日、聖武天皇が、「端午節会」を再び始めたそうです。(参考)国史大辞典

聖武天皇って、6年生の社会科の教科書で勉強するよね。奈良時代の聖武天皇が、端午の節供と関係あるなんて、びっくりだよ！



このとき、「菖蒲の御案(あやめのつくえ)」と「菖蒲鬘(あやめかづら)」、「薬玉(くすだま)」が書かれています。どれも、菖蒲を使いました。(参考)日本まつりと年中行事事典

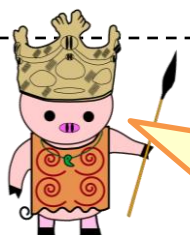
- ・「菖蒲の御案」とは、菖蒲をのせて運んだ机のこと。
- ・「菖蒲鬘」とは、菖蒲で作った、頭につけるかざりのこと。
- 男性は冠につけ、女性は髪にさしました。
- ・「薬玉」とは、薬草などを袋に包み、これに菖蒲、蓬などを結びつけて、五色の糸をたれさげたもの。悪い気を払い、寿命が延びる、とされていた。

先ほどの天平19年(747)5月5日の「端午節会」では、「菖蒲鬘」をつけて参列し、天皇から「薬玉」をいただく決まりでしたが、「菖蒲鬘」をしない人は、皇居の中に入れなかった、という記録があります。(参考)国史大辞典、『続日本紀』

へいあんじだい せちえ しょうぶ しゅうかん
平安時代にも、五月の節会では、菖蒲をかざる習慣がありました。
せいしょうなごん か まくらのそうし
清少納言が書いた『枕草子』にも、

節は五月にしく月はなし 菖蒲、蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。
(節供は、五月五日に、及ぶものはない。菖蒲や蓬などが、ともに香り高く香って
いる様子は、とても趣きがある。) と書かれています。

(参考)国史大辞典



せいしょうなごん こくご しゃかい か きょうかしよ べんきょう
清少納言も、国語や社会科の教科書で勉強
したわ。なんだか、菖蒲をとおして、現代のわたし
たちとつながっているみたい。

かまくらじだい ぶし
鎌倉時代になると、武士たちが「端午の節供」をおこなうようになります。

たたかいはが仕事で、武道を大切にしていた武士にとって、菖蒲は「武道を重んじる」という意味の「尚武(しょうぶ)」と同じ読み方だったので、縁起がいいと考えられていました。菖蒲の葉の形が刀に似ていることから、悪いものを斬り払う力をもつと信じられていました。武士の子どもたちは、菖蒲の葉を刀に見立てて「菖蒲刀(しょうぶがたな)」として腰にさしたり、菖蒲の葉で地面を打ちあう「菖蒲打」(しょうぶうち)をおこなったようです。(参考)日本民俗資料事典

えどじだい ばくふ ぎょうじ さだ けっか
江戸時代になると、幕府が「端午の節供」を行事として決めました。その結果、
ぶし しょみん ひろ
武士だけでなく、庶民にも広がっていきました。

ところで、「端午の節供」はもともと、中国から伝わってきたのでしたね。

つぎ はなし
次の話では、どのようにして「端午の節供」が生まれたのか、調べましょう！

だいさんわ
第参話につづく...

(次回予告) 「楚」で生まれた？そーなんだ！ だいさんわ だいさんわ
第参話「楚、厄除けの風習」